

公益目的事業 2 (展覧会事業)

1. 「寛永の雅」展の開催 (48 日間、朝日新聞社と共催)

- ア. 名称 「寛永の雅 江戸の宮廷文化と遠州・仁清・探幽」
- イ. 会期 平成 30 年 2 月 14 日 (水) ~平成 30 年 4 月 8 日 (日)
- ウ. 概要 江戸幕府が成立し、新たな時代の幕開けとともに花開いた文化、それが「寛永文化」であり、寛永文化は「きれい」という言葉に象徴される瀟洒で洗練された造形を特徴とし、当時の古典復興と相まって、江戸の世にそれまでにない「雅」な世界であった。本展では寛永文化の中心にあった後水尾院と宮廷文化をはじめ新時代の美意識が、小堀遠州、野々村仁清、狩野探幽らの芸術に結実していく様子で紹介。論文上でのみ議論されてきた寛永文化を美術作品によって再現する、ほぼ初めての試みとして美術識者から高い評価を得た。
- エ. 展示 「源氏物語絵巻」 住吉具慶 五巻のうち第二・三巻 MIHO MUSEUM  
「瀬戸肩衝茶入 銘飛鳥川」 湯木美術館  
「桐鳳凰図屏風」 狩野探幽 サントリー美術館  
「白釉円孔透鉢」 野々村仁清 MIHO MUSEUM

2. 「清朝皇帝のガラス」展の開催 (61 日間、朝日新聞社と共催)

- ア. 名称 「ガレも愛した—清朝皇帝のガラス」
- イ. 会期 平成 30 年 4 月 25 日 (水) ~平成 30 年 7 月 1 日 (日)
- ウ. 概要 中国ガラス工芸が飛躍的な発展を遂げた清王朝時代、特に第 6 代乾隆帝の治世に栄華を極めた。ガラスと言えば、「透明性」と「はかなさ」が最大の魅力であるが、最盛期の清朝のガラスは「透明」と「不透明」の狭間で、重厚で卓越した彫琢が際立っており、その美しさはエミール・ガレをも魅了し、彼の造形に取り込まれたほどであった。本展では清朝皇帝のガラス美をガレの作品とも比較しながら、有数のコレクションを紹介。ガラスがもつ、華やかかつ煌びやかな世界に女性を中心に多くの美術ファンが魅了された展覧会となった。
- エ. 展示 「青地赤茶被魚蓮文瓶 乾隆年製銘」 ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館  
「白地二色被花鳥文瓶」 サントリー美術館  
「花器 カトレア」 エミール・ガレ サントリー美術館

### 3. 「琉球」展の開催 (42 日間、読売新聞社と共催)

- ア. 名称 「琉球 美の宝庫」
- イ. 会期 平成 30 年 7 月 18 日 (火) ～平成 30 年 9 月 2 日 (木)
- ウ. 概要 琉球王国では、豊かな風土を背景に華やかな染織やきらびやかな漆芸など独自の美が生み出された。本展では、東アジアの文化を結び新たな美としてひらいた琉球王国の輝きを、琉球王家尚家伝来品をはじめとする琉球美術の貴重な品々で紹介。特に、中国・日本といった周辺各国から刺激を受けた絵画は、東京で紹介されることは少なく大変貴重な機会であったとともに、これまでの琉球をテーマとした作品構成とは違う視点で企画された展覧会として、サントリー美術館の企画力の高さを世間に伝えることが出来た。
- エ. 展示 「白地流水蛇籠に桜葵菖蒲模様衣裳」 沖縄県立博物館・美術館  
「白沢之図」城間清豊 (自了) 沖縄美ら島財団  
「神猫図」山口宗季 (呉師虔) 那覇市歴史博物館  
国宝「玉冠 (付簪)」 那覇市歴史博物館

### 4. 「醍醐寺」展の開催 (48 日間、総本山醍醐寺・日本経済新聞社・テレビ東京・BSジャパンと共催)

- ア. 名称 「京都・醍醐寺 --真言密教の宇宙--」
- イ. 会期 平成 30 年 9 月 19 日 (水) ～平成 30 年 11 月 11 日 (日)
- ウ. 概要 京都にある醍醐寺は真言密教の拠点として古くから歴史の表舞台で重要な役割を果たしてきた。本展では、国宝・重要文化財に指定された仏像や仏画を中心に、普段は公開されない貴重な史料・書籍を通じて平安時代から近世にいたる醍醐寺の変遷を辿るとともに、桃山時代に豊臣秀吉が行った「醍醐の花見」や、三宝院の襖絵など醍醐寺をめぐる華やかな近世美術も紹介した。来場者数は 2016 年の「鈴木其一展」以来の 10 万人超を記録する等、根強い仏像人気の高さを裏付けるものとなった。なお本展は九州国立博物館にも巡回。
- エ. 展示 国宝「文殊渡海図」 京都・醍醐寺  
重要文化財「如意輪観音坐像」 京都・醍醐寺  
国宝「五大尊像」 京都・醍醐寺  
重要文化財「醍醐花見短冊」 京都・醍醐寺

### 5. 「扇の国」展の開催 (46 日間、朝日新聞社と共催)

- ア. 名称 「扇の国、日本」
- イ. 会期 平成 30 年 11 月 28 日 (水) ～平成 31 年 1 月 20 日 (日)
- ウ. 概要 細く折り畳める「扇」は日本の発明品であり、宗教祭祀や日常生活、芸能や遊戯

の場など日本人の暮らしと深く関わり、装飾的に発展してきた。常に携帯できる扇は、いつでもどこでも楽しめる最も身近な「生活の中の美」であり、さらには屏風や巻物そして工芸や染織なども結びついて多彩な作品を生み出してきた。本展では、扇デザインの屏風や画帖、漆工、陶磁、染織、金工など多彩なジャンルで、日本人が愛した悠久の扇の世界をあますところなく紹介した。また本展は朝日新聞の2018年回顧において高階秀爾氏の選ぶ美術展ベスト3の1つに選出された。なお本展は山口県立美術館にも巡回。

- エ. 展示 「国宝「扇面法華経」 四天王寺蔵  
重文「扇面貼交手筈」 大和文華館蔵  
「黒地扇面散模様振袖」 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵  
「扇面流図屏風」 六曲一双のうち右隻 出光美術館蔵

## 6. 「河鍋暁斎」展の開催（48日間、河鍋暁斎記念美術館・朝日新聞社と共催）

- ア. 名称 「河鍋暁斎 その手に描けぬものなし」  
イ. 会期 平成31年2月6日（水）～平成31年3月31日（日）  
ウ. 概要 多様な分野で活躍した画鬼・河鍋暁斎。その画業については、長らく風刺画や妖怪画などに焦点が当てられてきたが、近年の研究により、駿河台狩野家の伝統を受け継ぐ筆法と、最初の師・国芳の下で培われた独創性をベースに活躍の場を広げていった姿が明らかになりつつある。本展では、幕末・明治の動乱期に独自の道を切り開いた暁斎の足跡を展望するとともに、先人たちの作品と真摯に向き合った暁斎の作画活動の一端を紹介した。会期中は日本人のみならず外国人の姿も多数みかける等、国内外における暁斎の人気の高さを感じさせた。

- エ. 展示 「観世音菩薩像」 日本浮世絵博物館  
「枯木寒鴉図」 榮太樓總本舗  
「花鳥図」 東京国立博物館  
「文読む美人図」 河鍋暁斎記念美術館

## 収益事業

### 1. 物販事業

所蔵品をモチーフとした商品開発、展覧会内容・季節の催事を取り入れた店頭ディスプレイにより、お客様に繰り返し足を運んでいただける魅力的なミュージアムショップを目指した。）

### 2. 飲食事業

「加賀麩 不室屋」の老舗ならではの信頼感とブランド力を活かしつつ、現代の感性を取り入れたメニューを提供し、新規顧客の拡大とリピーターの増加を目指した。

### 3. 貸室事業

「茶室」の貸出を通じて、収益を得るだけでなく、日本の伝統文化の啓蒙という当館ならではの価値訴求を心掛けた。

以 上